

Title	ヴィットフォーゲルの思想形成： 一九二〇年代初期作品に中国論への出自を求めて
Sub Title	The thought of K. A. Wittfogel : research for starting point of Wittfogel's Chinese theories in 1920's
Author	楳沢, 栄一 (Gumisawa, Eiichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.12 (1988. 12) ,p.165- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	多田真鋤教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19881228-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19881228-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ヴィットフォーゲルの思想形成

——一九二〇年代初期作品に中国論への出自を求めて——

楳 沢 栄 一

一、はじめに

二、若干のクロナロジカルな考察

三、一九二〇年代初期の戯曲作品と中国への憧憬

四、学問論と市民社会論にみる中国論の萌芽

### 一、はじめに

人々の飽くなき合理性が文化を商品と化し、思想をファッションと化す今日の大衆社会状況は、少し前の思想を語るものなら、「レトロ趣味」とかいう風俗語で、皮肉をこめて一笑されてしまう時代である。このような状況の中で、あえてK・A・ヴィットフォーゲルの思想の論考を試みるのは、一人の人間史の興味と同時に、彼の思想が、文化の商品化とも、思想のファッション化とも無縁で、社会科学の力のある部分を持続しているように思うからである。

彼の思想が注目を集めたのは、戦前の一九三〇年代の中国論からであった。わが国でも多数の翻訳書が出版され、経済学、政治学、歴史学などの各分野においても、彼の知名度は高かった。忍びよる戦争という暗雲が地球を覆う中、彼の思想は人々に忘れさられたというより、むしろ熟成していったのではなからうか。一九五七年にアメリカ合衆国で出版された『東洋的専制主義』<sup>(1)</sup>という彼のライフワークとしての大著は、このことを証明していると同時に、人々の注目を再びあつめることになる。また今日では、「従属理論」のからみで、アジア的(中国)社会の権力構造にメスを入れたヴィットフォーゲルの理論が、関心をもたれている。<sup>(2)</sup>

ここで今、われわれがもつ関心の視座をいくつか整理しておこう。第一は、彼の中国論である。わが国にも戦前から「支那学」なるものがあり、中国研究は比較的盛んに行われていた。しかし、社会科学の分野に限ると大きく二つの潮流があるように思う。一つは日本の大陸政策を遂行するために、有効な資料や理論を提供するもので、当時の国家戦略に重なる研究の方向である。<sup>(3)</sup> もう一つは、これと全く逆の立場、つまり、天皇制軍国主義に抗するとともに、マルクス主義の立場から研究を行うという方向である。<sup>(4)</sup> 一九三〇年代において、ヴィットフォーゲルも、後者の立場の人々によって紹介、導入、注目されたのである。しかし、彼の中国論は、ソビエトマルクス主義の正統派の考えとも、またそれを批判し粛清されてしまったD・B・リャザノフ、E・S・ヴァルガ、N・I・ブハーリンの考えとも異なるものであった。ここにおいて当時、ヴィットフォーゲルに、いつの世にあっても都合のよい「異端者」のレッテルが貼られたのである。また戦後に提起される「水力社会」(hydraulic society)の概念は、マルクス・エンゲルスの理論の射程を越えるものであった。このようなものを生み出す基盤となっている彼の中国論とは何か。大変興味あるところである。

彼の中国論は「アジア的生産様式論」にも関係する。この論争は、一九三〇年代に第一回目がソビエトで起り、<sup>(5)</sup> 一九六〇年代になり、今度はフランスの『パンセ』(La Pensee)誌上を中心に論争が再燃することになる。<sup>(6)</sup> もちろん

わが国にも、この論争は波及し、書物や論文は、戦前・戦後を通じて数多くある。<sup>(7)</sup>

第二は、一九三〇年代前半に特に集中しているヴィットフォージェルの文化・芸術論ならびにファシズム論である。<sup>(8)</sup> 前者は、プロレタリア文化論やマルクス主義芸術論を展開したもので、革命的社会主義者F・メーリングとの論争は有名である。ファシズム論は、ヒトラー論も含めて彼独自の分析による論点があり、興味あるところである。

第三は、彼の政治的変節である。アメリカ合衆国亡命後は、政治活動の舞台からは姿を消し、専ら研究活動に専念するヴィットフォージェルであった。しかし、一九五〇年、マッカーシー旋風<sup>(10)</sup>という反共キャンペーンが、アメリカ全土を席卷する中で、ヴィットフォージェルの運命は、また大きな転期を迎えるのである。マッカーシー上院議員を中心とする反共グループが、政府及び学術機関への共産党の侵入を問題にしてくる中で、ヴィットフォージェルは、一九五一年八月、P・マッカラン上院議員の公安小委員会での証言を要請される。ここにおいて彼は、アメリカでの、フランクフルト大学中心の研究集団の「社会研究所」と、アメリカの学術機関である「太平洋問題調査委員会」(The Institute of Pacific Relations) の関係をかかなり詳しく証言することになる。<sup>(11)</sup> ここにおいて、駐エジプトカナダ大使であり、安藤昌益の研究で有名なE・H・ノーマンの名前を初めて出したとされている。<sup>(12)</sup> 後に彼は、共産主義者と非難される中で自らの命をたつことになる。このことは、魔女狩りの協力者としてのヴィットフォージェルを、世間に印象づけるものであり、反共産主義者ヴィットフォージェルの公然の表明ということにつながってくる。この時にはすでに、彼と「社会研究所」との関係は薄れていたが、フランクフルト学派の仲間には「好ましからざる人物」の印象を深く刻んだのである。「背教者」というまたしてもありがたくない汚名が、彼に及びせられたのも、この時期である。一九三〇年代にはマルクス主義の「異端者」という、一九五〇年代にはマルクス主義の「背教者」というラベルを貼られたヴィットフォージェルの政治的変節は、一体何が起因しているのか、これまた興味あるところである。

ヴィットフォージェル研究には、以上のような様々な関心の視座があるが、本稿においては、第一に述べた中国論に

ついで、特に一九二〇年代前半の青年期の思想形成の中での中国論の出自について、論考してみたいと思う。

## 二、若干のクロノロジカルな考察<sup>(14)</sup>

ヴィットフォークゲルは、一八九六年ドイツのハノーヴァー近くの小さな村に、教師の子として生まれる。早熟で独立心が強く、創造力豊かな少年であった。また子供の能力を越える宗教や読書にも非常に興味をもっていた。一九〇四年ギムナジウムに入るが、彼の少年期に影響を与えるのは、一九一二年に入った「ドイツ青年運動」(ワンダーフォーゲル)であった。そこでリーダーとしての頭角をあらわすと同時に、様々な勉強や体験をすることになる。<sup>(15)</sup>一九一四年、第一次大戦の開始とともに、友人の多くは、志願兵として戦場に赴いていった。しかし、ヴィットフォークゲルは入隊することなく、戦争を敢えて拒否するかのようになり、詩や戯曲の創作に耽っていた。この年に書かれた戯曲に「ライラック偶像」(Der Lilac Götz)や「トーチを振る人」(Der Fackelschwinger)などがある。これらの中には、いずれもヴィットフォークゲルと重なりあう青年主人公が出てきて、家族、社会、国家、宗教などあらゆることに反抗し、挑戦と敗北を繰返しながら、それらを克服せんがため苦闘する物語である。これは、青年ヴィットフォークゲルのストイックかつイデアリスティックな心情と、改革者としての情熱を反映するものであった。この年に、ヴィットフォークゲルは、ライプツィヒ大学に入る。ここでは、W・ヴィントの哲学史、K・ランプレヒトのドイツ史など学んだ。しかし、「支那学」の教授にA・コンラディやE・エルケスがおり、その講義を受講したことは、彼の今後の人生に大きな影響を与えるものであった。一九一五年には、ミュンヘン大学に行く。しかしここでは、大学の講義よりも、学生達によって設けられた二つの講義に興味をもったのである。T・マンの自らの朗読による、ベルギー侵略を正当化したエッセイ「フリードリッヒと大連合」(Friedrich und grosse Koalition)や、ドイツの戦争批判をしたW・ヘルツォー

クに熱心に聞き入っていた。この年に「ルリック」(Rurik)と「天国の門の前のヒンデンブルク」(Hindenburg vor dem Himmelstür)という戯曲を書く。前者は、恋人とおぼしき人のために書かれたとされるが、宗教者と墮落者とを対称化する中で、ヴィットフォーゲルの当時の疑問や複雑な信条を表現するものであった。後者は、ユーモアに満ちた劇で、帝国軍隊の偶像性をあざけるものであった。しかし、ヴィットフォーゲルの告白によれば、この一九一五年から一六年にかけての年は、人生で最も寂しい時期であり最低の時期であったと言っている<sup>16)</sup>。それは、父の病氣から来る悲哀心と自らの立場の閉塞状態にあった。ここからの脱却は、彼がベルリン大学に行くことによって解決のきざしがみえてくる。ベルリン大学では、神学部の講義に出たり、G・ラッソンのヘーゲルについての講義を聞いたことは有意義であった。しかし、さらに重要な意味をもってくるのが、一九一六年、メックレンベルグのロストック大学で学んだことである。H・B・ガイニッツ老教授の下で地理学や地質学を学び、またR・エーレンベルク教授の下で経済史を学んだことは、後々に、ヴィットフォーゲルに社会科学者としての道を歩ませることになるのである。しかし、文学的創作を止めたわけではなかった。一九一七年には「人生の進行方向」(Die Marschrichtung des Lebens)という詩や「ギムナジウムの学生」(Die Gymnasium Student)という小自伝を書いている。この年には、再びベルリン大学にもどり、家庭教師のアルバイトをしながら、勉学に勤しんだ。W・ペンク教授の地理学や地質学に、またM・ベルトハイマー教授のゲシュタルト心理学にも興味をもった。この時期に、家庭教師での教え子の一人に、東洋における宗教について質問をされたのが、ヴィットフォーゲルをして、東洋に関心を向けさせるきっかけとなったと告白している<sup>17)</sup>のは、その記憶の強烈さからしても、確かに重要なきっかけだったのかもしれない。しかし実際は、ヴィットフォーゲルは、このころ東洋特に中国に深い関心と興味を示し、すでに相当の知識を得ていたようである。一つは、不安定なヨーロッパ政治の中で抱く中国への政治的社会的興味からであり、もう一つは、当時有名であったR・ヴェルヘルム訳の中国古典の中にみられる文学・哲学・思想的興味からである。一九一八年十一月は、革命的兵士と労働者に

より、戦争とヴィルヘルムⅡ世の君主制の終焉の時であった。またこの年は、社会民主党(S.P.D.)の分裂の年でもあった。ヴィットフォーゲルは、この左翼勢力が作った独立社会民主党(U.S.P.D.)に入党する。そして、この独立社会民主党の最左翼にいたローザルクセンブルクは、ドイツ共産党(K.P.D.)を創立することになる。ヴィットフォーゲルは、二年後の一九二〇年にドイツ共産党に入党することになるのである。しかし、このような政治的实践は、彼の研究生活をおろそかにするものではなかった。ベルリン大学では、引き続き、E・メーヤーやU・ウィルケンの下で古代史を、また、A・フィアカントの下では社会学を学んでいる。一九一九年、彼は、ベルリンの「新離党ギャラリー」(Neue Sezession Gallery)で、初めて中国論についての講義をしている。これは、先のヴィルヘルムの翻訳やコンラディの人類学的見地を基礎に組立てたものであった。ヴィットフォーゲル自身の関心は、このころ老子や道教思想などにあり、講義の中心もそちらに片寄りがちであった。この年、ドレスデンでも講義をし、そこでK・メイと会っている。彼の地理学的かつ人類学的とでも表現しうる冒険物語は、多くのドイツ知識人に影響を与えたものである。ヴィットフォーゲルもその中の一人であった。この年の暮になると、彼は、テューリンゲンのゲラ近くにある労働者階級の高校で、経済学と社会学の講義をしている。ここは、「テンツの砦」(Schloss Tinz)といわれ、十一月革命以前は小領主の所有であったが、その後社会主義者の成人教育施設にかわったものである。ここで、自らの著書『工場職場代表に対する労働者の権利』(Arbeitsrecht für Betriebsräte)の講義をした、K・コルシュとの出会いもあった。<sup>(18)</sup>

一九二〇年代初期は、ヴィットフォーゲルの思想研究にとって、大変興味深い時期である。一方で、彼は、少年のころより持ちつづけた文学的創作活動をつづけながら、他方、この時期に、これからの研究者としての礎となるべく学問論や市民社会論を書き上げるのである。一九二五年、ヴィットフォーゲルは、フランクフルト大学の「社会研究所」に入所することになる。後にフランクフルト学派と呼ばれるようになるこの研究者集団は、一九二二年夏に、ドイツのイルメナウで開催された「第一回マルクス主義研究週間」にまでさかのぼるといわれる。<sup>(19)</sup>素封家の息子F・

J・ヴァイルの急進的冒険の試みであったが、参加者には、J・ルカーチ、K・コルシュ、R・ゾルゲ、F・ポロツク、B・フォガラシ、K・シュミュレク、C・ツェットキン、H・グンベルツなどいて、錚錚たるメンバーの熱心な討議が一週間にわたって続けられた。そして、ヴィットフォークルも、この参加者の一人であった。しかし、彼の入所は、これから三年後であった。それは、彼の論文を、初代所長のK・グリュンベルクが指導及び検討をしてくれることになったからである。この研究所に入所してから、彼の本格的な中国研究が始まるようになってよい。一九二六年に、最初の中国に関する著作といわれる『目覚める中国』<sup>(20)</sup>が完成する。二七年、今後の中国研究に重要な意味をもつてくる論文「中国経済史の諸問題」(Die Probleme der chinesischer Wirtschaftsgeschichte)が発表され、中国二千年間の経済史の分析が着手される。二九年から三回にわたり『マルクス主義の旗の下に』(Unter dem Banner des Marxismus)に連載された「地理学、地理的唯物論、マルクス主義」(Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus)では、既存の地政学や、地理的唯物論批判がなされ、弁証法的唯物論と経済地理学的方法の重要性が提起されるものであった。そして、一九三一年には、今までの総決算ともいえる大著『中国の経済と社会』<sup>(21)</sup>が著わされた。これは、中国の経済・社会的土台の生活諸法則を分析し、理論づけたものである。

一九三三年、ナチスの権力篡奪とともに、「社会研究所」のメンバーは、ドイツからの出国を余儀なくされる運命にあった。これはメンバーの多くがユダヤ人であったこともあるし、ドイツでの非正統マルクス主義の最大のセンターでもあったからである。ヴィットフォークル自身は、非ユダヤ人であるが、ナチス迫害の手をまぬかれるというわけにはいかなかった。「社会研究所」の最後の脱出者の一人であった彼は、この年の三月には強制収容所体験を経て、十一月にイギリス経由で、ようやくアメリカにたどり着くことができたのである。自由の国アメリカでは、フランクフルト学派の本拠地であるコロンビア大学と、シアトルのワシントン大学に職を得ることができ、教鞭と研究の日々を送ることができた。一九三八年、「東洋社会の理論」(Theorie der orientalischen Gesellschaft)という論文が、彼らの



機関紙『社会研究誌』(Zeitschrift für Sozialforschung)に発表される。これは、ヴィットフォールグが、一九三五年から七年まで実際中国を訪れ、<sup>(22)</sup>調査研究をふまえた結果できた重要な論文である。一九五一年の議会証言事件は、彼についての様々な憶測と物議をかもししたが、研究活動は停滞することはなかった。一九五七年、彼のライフワークとも言える『東洋的専制主義』が完成する。これは、彼の考えた「水力社会」概念——水がいかにして権力に転化するか——をもって、中国論を展開する注目すべき大著であった。

さてここで、ヴィットフォールグとフランクフルト学派<sup>(23)</sup>（フランクフルト大学「社会研究所」を中心とした研究者集団）の関係を、少しみておくことにしよう。彼が、フランクフルト学派のメンバーの一人であったということは、あまり多く語られていない。実際、彼は、この中でもアウトターサークルの一人であったともいわれるし、考え方にも主流派の人達との齟齬があったといわれている。もともとこの集団は、種々な立場や意見の異なる人達の共存には、それほど神経質ではなかった。むしろ、様々の立場からの討議をうながし、その過程で新しい知を発見していくという柔軟性と創造性をもち合せた集団であった。この学派は、今日、ドイツ現代思想の一潮流を形成し、その思想の伝播は、フランス、イギリス、アメリカにもおよび、現在多くの研究者を輩出している。この学派の誕生は、先にも述べたところであるが、一九二二年の「第一回マルクス主義研究週間」に遡るが、公式には、一九二四年六月、フランクフルト大学の近くに研究所の建物ができ、そこでのK・グリュンベルクの開設の辞をもって、創立したのである。二〇年代の草創期を経て、M・ホルクハイマーが所長として赴いた三〇年代は、メンバーの拡大とともに花らしい活躍がみられた。理性を解消し非合理的要素を増大した「生の哲学」へ、理性と悟性を同一化し分析的で形式的悟性を重視した「論理実証主義」へ、そして、全くドグマ化してしまった「伝統的マルクス主義」へと向けられたホルクハイマーの「批判理論」<sup>(24)</sup>が注目を集めた時期でもある。しかし、歴史は、研究所の発展と逆行するかのよう益々暗い方向へと進むのであった。一九三三年のナチスの抬頭は、研究所とそのメンバーの運命を決定的なものにした。ドイツ知識

人の歴史的亡命が始まる。<sup>(25)</sup> その行先きは、理想の国家を夢みて進む社会主義国ソビエトでなく、自由あふれるアメリカであったことは、深く留意すべきである。一九四〇年代後半まで、フランクフルト学派のメンバーのアメリカでの活躍が始まる。それは、彼ら自身の業績もさることながら、アメリカに残した知的遺産のその後のアメリカ合衆国での学問的影響を考えると、今日計り知れないものがある。一九五〇年代に母国のフランクフルト大学への復帰が行われ、そこでの本格的な活動が、ホルクハイマー所長の下で始まる。六〇年代後半において、同一性が非同一年性を経てさらなる同一性へと帰還することを認めない「否定の弁証法」<sup>(26)</sup> で注目されたアドルノ所長の死まで、第一世代の活動が続いた。その後は、第二世代に引き継がれ、コミュニケーション理論<sup>(27)</sup> で世界中の注目を集めるJ・ハバースマス、現在の所長A・シュミット、またO・ネークト、A・ヴェルマーなどが活躍している。ドイツ思想界乃至世界の社会学の大きな潮流として、今日に至っていることは周知の通りである。

この研究所の中は、大きく二つのグループに分れていた。インナーサークルと呼ばれる集団は、中心的メンバーでホルクハイマー、アドルノ、K・ポロック、L・ローウェンタール、H・マルクーゼ、E・フロムなどがいた。ヴィットフォークルは、一九四七年研究所を正式に去るまで、終止アウターサークルの人であった。この中には、H・グロスマン、F・ボルケナウ、F・ノイマンなどがいた。前者のグループにおいては、ホルクハイマーの「批判理論」の有効性の共通認識の下で、様々な理論の展開があった。後者のグループは、前者が消極的であった政治的实践を、それほど無意味だとは考えなかった。ヴィットフォークルのように政党に属しているのもいたのである。このように、内部にいくつかのサークルがあったということは、もともとこの研究集団が、様々な立場の研究者から構成され、イデオロギー的結束にとらわれなかったことに原因している。このことは、不都合どころか、内部での論争を引き起し、理論的深化をもたらすという点で有効だったのである。それは、フランクフルト学派の伝統として、今日も根付いているのである。

## 三、一九二〇年代初期の戯曲作品と中国への憧憬

一八九〇年代に初まるといわれるドイツ演劇の黄金時代は、宮廷演劇の手法と断絶し、集団場面の導入、舞台と観客の分離の克服、演出家の芸術家化など変容がみられた。これが絶好調に達するころは、ワイマール演劇史の幕あけでもあったのである。<sup>(28)</sup>ベルリンの舞台では、立場がちがう二人の巨匠、M・ラインハルトやL・イェスナーがいた。また初期の演劇を牛耳った二人の劇作家G・カイザーやK・シュテルンハイムがいた。しかし、演劇界の前期の表現主義は、一九二二年ごろ終ってしまい、人々は新しい演劇を渴望していた。それは、人類一般より生身の人間であり、抽象的出来事より具体的出来事であり、カオスの自己満足より脱出の道しるべを求めたのであった。ここに後期表現主義の代表として、二人の新星があらわれた。一人は、E・ピスカートルであり、もう一人は、B・ブレヒトである。ピスカートルが、ドイツ演劇界に新風を吹きこむべくベルリンの劇場に登場してきたのは、一九一九年であった。彼の狙いとするところは、プロレタリアートの階級意識を高揚し、世界的革命に向う戦闘的闘士に彼らをならしめることであった。<sup>(29)</sup>しかし、皮肉なことに、この劇場に足を運んだのは、プロレタリア階級の人々でなく、リベラルでしかも知的好奇心の旺盛な一般市民が圧倒的に多かった。彼らは、このピスカートルの演出に喝采をし、新しい手法に目をみはった。しかし、彼らは、最初から喝采を送るためにやってきた人々であり、冷静で醒めた人々であった。したがって、効果といえ、彼らの心の中に、多少なりとも、毒にも薬にもならない罪悪感を引きおこすということに留ったのである。同時代のブレヒトと比較すると、彼の舞台はあまりにも政治的で一元的であった。一九二〇年代後半には、労働者を含めて一般大衆は、演劇を時代を映す幻想の空間としてとらえ、「異化効果」(Verfremdungseffekt)<sup>(30)</sup>をふんだんに生かし、政治にとられない革命的戯曲を演出するブレヒトに傾いていったのである。

ところで、ピスカートルとヴィットフォーゲルは、当時の左翼出版社『ブリーク』社(Malik Verlag)の仲間として、

旧知の関係にあつた。<sup>(31)</sup>そして、ピスカトールは、ヴィットフォーゲルの戯曲に何よりも興味をもった。ピスカトールは、自らの演劇理念を述べた『政治劇』の中で、政治劇は「プロレタリア劇」として始まり、後に「叙事詩の劇」となった。大学とプロレタリアは、その誕生に対して責任があるといっている。<sup>(32)</sup>この事態にかなうのがヴィットフォーゲルの作品だったのである。一九二一年から二四年にかけて、ヴィットフォーゲルの作品のいくつかが、このピスカトールによって演出され、戯曲作家ヴィットフォーゲルの名を世に知らしめることになる。<sup>(33)</sup>

ヴィットフォーゲルの戯曲の処女出版作は『赤軍兵士』<sup>(34)</sup>で、一九二一年に書き上げられた。これは、ピスカトールによって、さっそくベルリンの劇場で上演されることになった。内容は、当時のヴィットフォーゲルの共産主義に対する考えを明確にするものとして注目される。特に共産主義者の倫理問題に大変関心をもっていたことがわかる。彼は当時、マルクス主義や中国の研究を続けるかたわら、戯曲を書き続けた。続いて完成するのが、『理性をもてる男』<sup>(35)</sup>である。プロレタリア戯曲作家として名を売りつつあった彼は、これをプロレタリア革命劇に仕上げたのである。副題に「エロティック劇」とあるところが興味深い、内容は次のようなものである。甘味な恋の賄賂により、家庭を犠牲にしてまで労働運動に入れこんでいる男の革命的意識を萎えさせてしまおうとするブルジョア貴婦人の攻勢がある。そして、これに囚われつつ、そこから脱却しようともがき苦しむ一人の男の闘士の苦悩をあつかったものである。そして最後に、己れの自立の戦いに勝ち理性をもったこの男が、彼と同じ階級ならびに貴婦人を、新しい革命的人物として、生まれかわらしめるというストーリーである。まさに、ピスカトール好みのストーリーであった。

一九二三年になると、『母』と『逃亡者』<sup>(36)</sup>という作品が出来上り、上演されることになる。前者は、先の『理性をもてる男』の中で登場したブルジョア貴婦人が、「新しい婦人」として生まれかわり、今度は、政治犯を救う闘争を始めるというものである。後者は、再び最初の主題に返り、『赤軍兵士』の中にみられたように、無神論者で、神を敵対視し、神を否定する者が、革命によって新しい宗教(主義)を発見していくというものである。この戯曲が、一冊

の本として出版される段階で、興味ある論文が付録として付加えられた。それは「革命的劇場の限界と課題について」<sup>(37)</sup> (Über Grenzen und Aufgaben der revolutionären Bühnenkunst) とタイトルがつけられた短い論文である。要約すると次のようになる。①革命的芸術は、価値の転換を眼中におかねばならないということ。②作家と演出家は、自らの思想や表現形式を、価値の批判として、次の時代に根強く植えつけなければならぬ。③したがって、革命的芸術家と称し、ブルジョア社会の価値体系にのっとり、芸術作品を製作することは矛盾である。④これを克服するには、プロレタリア市民劇場の獲得を強行しなければならない。⑤だが素人劇場は結局のところ、空想的であり、小ブルジョア的であるから批判されるべきである。⑥そこで、現段階で最も有効なのが、人形芝居 (Puppet Spiel) である。この形式の小劇場は、建物や経営、俳優のギアラや人数において大資本的要求を生じさせない。これはまた、諷刺と喜劇の形式を、社会・政治批判を可能にする。グロテスクな材料を用い、ユーモラスで、諷刺的で、批判的であるこの形式は、今までの古い演劇形式の閉塞状況を打ち破り、新しい出口を見つけることができるのである。

この演劇論を発表した後で書かれたのが、一九二三年の『誰れが一番馬鹿か』<sup>(38)</sup>と、二四年の『摩天楼——アメリカスケッチ』<sup>(39)</sup>である。これらは、もちろん、人形芝居用に創られた戯曲であった。前者は、資本主義の悪と、社会主義の価値を対比することにより、最後に誰れが一番馬鹿かを提示するという諷刺劇である。動物がたくさん出演し、ユーモラスな振舞をすることからも、子供も楽しめるが、大人にとっても、鋭い諷刺と現実批判は、何かユーモアの中にも訴えるものがあつた。彼の作品の中で一番のヒット作品になったのである。そして、この作品の中で初めて、中国の場面や人物が登場し、ストーリーに大きな役割を果している。それでは、この作品をみてみよう。

序幕の第一場——どうして猫が鯉節番となったか。なかなかおもしろいタイトルである。これは、ドイツのサクソニア地方のある村の広場である。フォクストロトル (悪運の男)、その妻、その娘のゲルトルト、老フランツ (正義感あふれる正直な職工)、その息子の若フランツ、友人のマックス、その他多数の職工たちが集まっている。町からの

織物買い付け人に、いつも製品を値切られているため、その打開策を考えるために集まっているのだ。結局、自分達の代表が、直接町に売りに行ったらよいということになり、その代表者を決めることになった。そこで考え出されたのが、一人ひとりが布切れの下に入り、自分の靈感を出現させ、その内容により、代表を決めるというのである。フォクストロットルの靈感には、労働は少ししかみえず、森の中の別荘や庭、自動車や鴛鴦の焼肉やキャビア、お金のつまった金庫があらわれた。人々は、こぞって彼を自分達の代表に決めてしまうのである。まさに猫が鯉節番となったのだ。

第二場——一番酷い悪者が頭に立っている——。場面がかわり、村に出来た工場の事務室である。フォクストロットルの居場所がわからなくなり、困り果てた職工達は、この工場に来て原料を分けてもらおうと乞うている。しかし、実はこの工場の所有者にフォクストロットルがなっていたのである。職工達は怒り心頭に発するのだが、後の祭りである。フォクストロットル自身は「お前達は明日からいやでもこの工場で働くことになる」とうそぶく始末だ。しかし、職工達の団結は益々強まっていく。

第一幕——蝶々狩りとその出来事——。場面はフォクストロットルのかつての靈感通り実現した、高い塀に囲まれた別荘である。若フランツと友人マックスは、美しい蝶々を追って庭に入りこむ。娘ゲルトルトに発見され、三人は、なつかしい対面をする。若フランツとゲルトルトは、仲むつまじい関係になり、結婚にまで話がおよぶ。そこに、金満家フォクストロットルが入ってきて、二人の仲に大反対する。なぜなら、好き好んで労働をし、貧困の中で生活するような者は、世界中で一番馬鹿だというのだ。友人マックスが、何とか二人の仲を許すよう訴えるが、フォクストロットルは聞き入れない。そして、こんな条件を出してきた。それは、世界中を巡って、若フランツより馬鹿な人間を連れて来たら、娘との結婚を許すというのである。若フランツとマックスは、自信に満ち世界旅行に出ることになる。

第二幕—本当の喰人種に交つて—。場面はアフリカのジャングルで、ムンゴという男は、黒人王ブンバールンバの忠実な臣下で、鰐の番をしている。そこに王が、侍医や首切り役人グルグルや兵士を引き連れやってくる。その目的は、王が敵の兵士を食べ、鰐が外れたために、鰐の霊力で治すということである。しかし、いくら侍医が努力しても、いっこうに王の鰐の痛みはとれず、侍医は追放されてしまう。そこに若フランツとマックスが来て、二、三度王の鰐を拳で殴って治してしまふ。王は喜び、必要なくなった鰐番のムンゴを、首切り役人に殺させて、二人に喰せようとする。ムンゴは、それを知りながら、自分を焙る鍋に薪をくべる準備をする。若フランツとマックスは、このムンゴは、自分達より上手の馬鹿だと認識する。そして、これは是非、サクソニアに連れて行き、フォクストロツトルに会わせなければと思うのである。

第三幕—腹切り—。中国のある寺の内部が場面である。そこには、等身大の半裸像の仏像があり、その左側には、大きな屏風がある。寺の住人は、すこぶる悪辣な性格の大僧正の迂平狼と、小仕掛けな詐欺師の僧正と寺男の三人である。そこに、敬虔な考えをもつが、少し間のぬけた中国人の大商人の愚李丙がやってくる。若フランツ、マックス、そしてムンゴは、船でサクソニアに帰る途中にここに立ち寄り、何かおもしろい事が起りそうなので、屏風の後にかくれて、様子を見守っている。迂平狼と僧正の大詐欺が始まる。仏の台座に迂平狼が仏になりすまして座り、その後僧正が隠れている。仏のそばには、「噓をした者は死ななければならない」と看板が人目につくようにかけてある。これは、仏門に入るには肉体の欲求に克たなければならず、さもないと死があるのみだということだ。準備ができたところに、災厄で家族を失い、仏に仕えたいという愚李丙がやってくる。彼らは、この大商人から財産を根こそぎ譲り受けようとの魂胆なのである。仏を拝んでいる最中に、僧正が噓粉を吹きつけると、愚李丙は、大きな噓をした。さあ大変だ。看板通り死（腹切り）が命じられることになる。財産贈与の手続きが終り、いよいよ愚李丙の腹に短刀があてられたところで、若フランツ、マックス、ムンゴがとび出し、窮地を救うことになる。迂平狼、僧正を前に、

彼らの大詐欺をあげき、追っばらつてしまふ。馬鹿をもう一人みつけた三人は、大喜びである。若フランス、マックスは、ムンゴ、愚李丙を連れて急いでサクソニアにもどつて来る。

第四幕―最後に笑う者が一番よく笑うのだ。再びフォクストロトルの別荘の大きな部屋である。彼に雇われるはめになった、老フランスをはじめ多くの職工達が、賃上げ要求のために集まっている。しかし、フォクストロトルのよい返辞はない。老フランスにしてみれば、このような大工場になったのは、もともとは自分達のお金を元にしたからであり、その証拠の勘定書きが、すぐそばの大金庫に入っていると思っている。そこに、若フランス以下四人が帰ってくる。若フランスは、自分より馬鹿を二人連れて来たと、そして、ゲルトルートとの結婚も、許してもらえたと得意満面である。しかし、フォクストロトルは、ここに来てもまだ認めようとしなない。それどころか、もう時効にかかっているという始末だ。しばらく問答が続くが将があかない。そうこうしているうちに、愚李丙の大演説が始まるのである。少し引用してみよう。

愚李丙 フランスノ

フランス 何か用かい。

愚李丙 お前さんが、この私を中国から連れて来たのは、私が当時世界で一番馬鹿だと思つたからだらうね。

フランス そうさ、それがどうしたノ

愚李丙 怒っちゃいけませんよノ お前さん達は皆んな、お前さんも、お前さんのお父さんも、その他の職工さんも、私やムンゴよりもっともっと馬鹿のような気がするんだノ 何故なら、ムンゴが王様にまんまと騙されたのは、王様に絶大な権力があると思つたからだ、と同時に、私が神の犠牲になろうとしたのも、そんなものが実際にあると思つたからだ。だがお前さん達は、フォクストロトルが酷い奴だつて事を御存知なんだノ それから、その証拠が、九十九パーセントこの金庫の中にあることも知っているはずだノ それなのに、いつまでも黙っていて、こんな畜生に勝手なまねをされているのだ。お前さんは許婚を取られるし、他の朝晩食うパンは盗まれるしさノ そうすりやお前さん達は何といつていいか、適当な言葉を思い出すのに困るほど馬鹿じゃないかノ



一同 (新たに気づいたように) そうだ、愚孝丙のいう通りだ、愚孝丙のいう通りだ、<sup>(40)</sup>

人々の一致した覚醒は、一気に金庫をぶち破り、その証拠を取り出すことになった。その中で、ただ一人フォクストロットルだけは、意気消沈し、誰が一番馬鹿かを争ってきた自分が一番馬鹿だと悟り、泣きだすのである。

少々長い説明になったが、この人芝居の特色は次のように思われる。まず第一にこの作品は、政治的内容の中に諷刺あり、ユーモアあり、皮肉あり、童話的要素ありで、以前の彼の戯曲の少々シリアスで、ストイックな特徴とは異なっている。第二に、プロレタリア劇としての性質は、ピスカトルとの共通性を持つが、場面のサクソニアからアフリカ、中国というようなドラマティックな移動は、ブレヒトの「異化効果」を彷彿させるし、舞台を、時代を映す鏡のように、また幻想の空間とみるブレヒトの演劇論に非常に接近しているように思われる。第三に、中国への憧憬がうかがえるということである。①構成の観点に立てば、まず中国の寺、それも仏教寺院に場面が移り、そこに現われる二人の僧の出現は興味深い。もちろん、ヴィットフォーゲル自身は、当時中国に行ったこともないし、実物の寺もみたことはないはずだが、何か書物からでも想像したのであろう。その独特の雰囲気やまく創っている。最も彼自身はこの当時、仏教よりむしろ儒教や道教により興味があったといっている<sup>(41)</sup>。また僧となれば、世俗の欲得とは無縁なはずであるが、ここには、全く逆の立場の僧が登場し、聖職者と全く逆の行動をとるのは、皮肉とユーモアであろうか。また、肉体的欲求にまけて、仏の前で嘔をしたら、死ななければならないという行<sup>くど</sup>は、仏教などにみられる禁欲思想への揶揄であろうか。さらに、第三幕の腹切りは、日本独特の風俗だと劇中いいながら、中国の場面で役者に演じさせているところも、なんとも興味深い。ヴィットフォーゲルは、日本の腹切りについて、どこかの書物で読んでいたのであろう。②さて動機の観点に立つと、大変興味深いものがあるように思う。ストーリーを単純に追っていけば、ヨーロッパ、アフリカ、中国(アジア)と場面が移る中で、いかにも、ヨーロッパ中心の考え方、つまり典型的な近代主義的考えに思えるが、終局で逆転している。ヨーロッパの近代人は、腹立しい資本主義の現実をみな

ら、自分達が一番馬鹿だと知る。それは、彼らが一番馬鹿だと思っているところの擗取されるアジア・アフリカの人々の助けがあつて、可能となつたのである。このようなことからしても、ヴィットフォークルには、これらの国のあらゆることに對する計りしれない興味と関心が根底にあるように思ふのである。これはまた、彼が今後社会学者として、マルクス、ヘーゲルなどとはちがう独特の中国論を展開する動機となつてくるのである。

いずれにしろ、この劇は、各国語に翻訳され、モスクワ、アメリカ、東京でも上演され世界の注目を集めた。しかし、一九三三年一月三〇日をもち、この劇は、ドイツでは一切中止され、ベルリンの街中での『誰が一番馬鹿か』の看板は、『誰が一番賢いか』(Wer ist der Klügster)の看板に掛替えられていたのである。<sup>(42)</sup>

#### 四、学問論と市民社会論にみる中国論の萌芽

一九二二年に出版された『ブルジョア社会の科学』<sup>(43)</sup>は、彼の最初の社会科学に関する著作として、また批判的学問論として、注目されるものである。内容的には、後の彼の学問関心を予知できるものであり、様々な概念の洗練化を随所に見ることが出来る。しかし、まだ理論的構築がなされた書とはいいがたく、ブルジョア学問批判を中心としたものである。第一章では、科学の概念が述べられ、第二章では、既存のブルジョア学問が批判・検討されている。その範囲は広く、学校論や、教授法にまで及んでいる。そして終章において、「文化改良か、革命か？」という刺激的タイトルで、マルクス主義者として自立しつゝあつた彼の考えを提起するものであつた。

さて第一章の要点をみるなら次の二点になる。①「科学の定義」と「社会」との関連の明確化である。彼は「われわれによつて与えられた科学の定義(生活顧慮の目的への自然ならびに社会における体系的定位手段)は、種々の社会秩序に對しても、それが組織化された社会構造として歴史的な生活統一態を形成する限り妥当する」といひ、ここに、「科

学」と「社会」との接点を求めている。「体系的定位手段」(systematisches Orientierungsmittel)としての科学は、現実の社会にもあてはまるし、またその中で初めて意義をもつことができるというのだ。これは、彼の社会科学に対する基本的理念とみてとることができる。②ブルジョア科学に対する徹底した批判的視点の確立があげられる。彼はいう「ブルジョアジーの科学は、ここにおいて似而非科学となってしまったのである。それは大衆のために定位手段たることを停止する。……支配者階級が、被抑圧大衆に似而非認識を提供し、下層農民や労働者達がこれを消費するうちに、彼らの精神的エネルギーを使い果してしまうならば、その時、非定位手段となるのである」と。この非定位手段となった科学にかわりうるものは何か。それは、彼にとっては、マルクス主義の社会科学ということになる。彼の狙いは、この社会科学をテコに、ブルジョア社会科学を批判・検討してみようということであった。それが第二章である。

ここでは、精密科学(自然科学)に始まり、文化科学(精神科学)と、その個別の学理——社会学、経済学、歴史学、言語学、倫理学、宗教学、哲学、芸術学など——に至るまで、批判・検討を加えている。もちろん、ブルジョア科学の社会や歴史の理解における主導的役割と貢献は当然認めるところであるが、この当時の若きヴィットフォージェルにとっては、マルクス・レーニンの社会科学こそは、このブルジョア科学の限界を克服するものと確信していたのである。

ここでわれわれは、彼の文化科学批判の中で展開される当時の中国論及び中国研究に対する見解に注目してみたい。彼は文化科学の特色を次のようにいう。「文化科学においては、実に劳作方法自体が直接に——間接にはもちろん自然科学だが——経済的機構によって、資本主義の社会的依存関係によって規定されている」と。このようなことから文化科学にはまず第一に「方法」が必要であると説く。つまりこれは「文化一元的考察方法としての史的唯物論」(Der historische Materialismus als kulturhistorische Betrachtung)だとうる。第二は、「価値の階序」(eine Rangordnung der Werte)の必要性を説く。ブルジョア社会の価値の中心は、何といても利潤である。しかし、これを乗り越えるた

めの新しい時代の価値の中心には、人間が入ってこなければならぬとする。このような観点で既存の文化科学をみると、ヴィットフォークルなりの批判点がみえてくる。その批判の対象者には、J・G・V・ヘルダーがいた。また、愛国的地理学者で、F・リヒトホーフエンの後継者のF・ラッツェルがいた。社会学者には、「経済体制」の概念を提起し、最初はマルクス主義に好意的であったW・ゾンバルトや、マルクス主義に近く大土地所有の研究をしたF・オッペンハイマーがいた。

一九二二年当時、ヴィットフォークルは、文芸活動に関心をもちながら、中国研究にも時間をさいていた。彼は、中国の経済、政治、地理、文学、言語、宗教とあらゆることに関心があつた。未だ見ぬ国への興味と関心と研究は、徐々にではあるが、確実に進行していたのである。さて、批判の基軸としてあげた「価値の階序」という点からみると中国研究はどうであろうか。利潤、現金支払いというような結紐によってのみ結合しているブルジョア世界の無政府性は、そっくり大学の無政府性に反映する。中国研究もそんな中にあると。「中国は、太平洋沿岸の帝国主義の中心問題である。中国は現代の大国の中で最古の文化をもっている。地上の四分の一は中国人である。体系的、実践的に利用しうる中国問題の文化的認識は——ドイツの帝国主義的ブルジョアジーの立場からしても——いわば眼前につきつけられた問題だといってよい。だが、大学の無政府主義が花開き、価値の時計の針は止ったままである。ギリシア、(古)インド、エジプト、アッシリア語、ヘブライ語等の研究の多くの講座のために、人々は金を用意している。この一切実なる——中国問題のためには人々は、戦前は単に一・五の講座をもっていたにすぎぬ。それらの中の一つを除いて、全体は(ベルリンにおいて)そのうち無雑作に閉られてしまった」と。利潤追求の紐帯が経済社会だけでなく大学にまで及んでくると、金にならない学問(ノ)は講座すらなくなる現実に対し、ヴィットフォークルは、まず疑問を呈す。学問が利益を求めた時、それは自殺行為になる。学問が人間を求めて行ったら真理に近づける。このことを確信しながら、彼は、現実の学問状況、大学状況を鋭く批判したのである。しかし、中国研究者が現実マイノリ

ティーであればあるほど、また、ブルジョア商人や旅行者の道具にしかならない中国研究が圧倒的に多い現実であればあるほど、ヴィットフォーゲルの中国研究への情熱は高まるのであった。さて、もう一つの「方法」という基軸からはどうであろうか。ベルリン大学シナ学教授J・J・M・ド・グロート<sup>(48)</sup>がとりあげられる。ヴィットフォーゲルがいうには、「ドイツの唯一の中国語の正教授、ベルリンのド・グロートは、中国文化の運命、構造、本質において語るべき何ごとを知っているのか。無だ。無以下だ。無い方がましだ。もし人々が、ド・グロートの著作の対象と、その精神にしたがって、東アジア世界の形象を造らうとすれば、それは大体次のような外観を示すだろう。中国人とは、出生とともに一定の宗教的習慣におかれ、祖先に犠牲を供するために成長し、宗教的祭礼をまつるために労働し、再び祈り、犠牲を供するために結婚し子供を産み、そして、ド・グロート氏に今一度、宗教的極微にわたる叙述(今度は葬式及び埋葬式の)をなす機会を与えるために——ホッと溜息をつきながら——死んで行く国民である。これでも世界といわれる世界なのだ。人々が知りたいと欲したものを、この中国の文化通訳者は語っていない。そして彼の語るところのものは、人々の知りたいと思っ**て**いるものではない」と<sup>(49)</sup>。つまり、方法論が彼にはないということである。たとえあつても、叙述の方法で、社会科学的方法論ではないというのである。中国宗教及び風俗を専攻したド・グロートに対し、厳しい見方である。しかし、方法的に準備のない仕事は、結果において紛乱または錯乱し、不愉快な偶然が生じるものであるという。確かに、ド・グロートのような仕事は、自己の必要なる中国知識を求め商人や旅行家にとつては、それなりの有益性はあるが、必ず誤りの部分をのこし、科学とはほど遠いものだというのである。そして、この誤れる部分を発見し、科学の本質たる「体系的定位手段」をもつものが、マルクス主義の科学だといふのである。「マルクス主義的見解が根底にあるような著作は——問題を看取し、総合(経済・社会組織及び精神生活)を発見し、そして事実に信じられる。かつ——実験が証明するように——正当なる文化形象を提供する。それは、組織されたる集合経験の応用されうる表現であり、科学なのだ」と<sup>(50)</sup>。そして、このマルクス主義の社会科学こそは、「社会学

的中心科学」(Soziologischen Mittelpunktswissenschaft)だ、というのだ。特に彼は、社会解剖学としての経済理論を重視し、さらにこれは根本的に究明せられた経済地理をもつてなりたつという。この経済地理を重視していることに注目したい。それはまた、ヴィットフォークル独自の社会科学論を形成していく出発点になるからである。

さて、次に彼の市民社会論に注目し、そこでのアジア及び中国への関心、さらに中国論への萌芽を探ってみよう。

この市民社会論の一つは、一九二二年の暮に書き上げられた『原始共産主義からプロレタリア革命へ』<sup>(51)</sup>という小冊子である。これは、原始社会から資本主義社会形成期に至るまでの人類社会史を展開したもので、幅広い内容をもつものである。ここでの彼の試みは、世界全体及び歴史全体の把握ということであった。原始共産主義の本質から始まり、国家の発生を説明し、経済発展と大衆の貧困及び奴隷化の矛盾を説き明し、歴史的発展において決定的役割を果すのは経済か政治かの難問を論ずるものである。世界の各地域を対象とした民族学や文化人類学や歴史学の先人達の学問業績を活用しながら、彼自身の人類社会史の再構成を企てている。特に注目すべきは、最終章の「中世の秘密」というところにある。彼はいう。「ブルジョア学者が、全く認めず、あるいは不明瞭にしか認めない事実を、われわれは、マルクス主義者として極めて明確に認める。その事実とはこういふことだ。封建主義は社会発展の一つの一般的通過段階であつて、この段階はなるほど個々の点に立ち入ってみれば、極めて大きな相違があるにはあるが、組織としては、フランスやドイツにも、イギリスやロシアにも、ニグロやマイレにも、インドや中国や日本にもかつて存在したし、また所々(アフリカ及びマレイヤインド)には、今日尚存在している」と。<sup>(52)</sup>これは、封建主義が、全く世界的に存在する政治現象形態で、また社会発展の移行的段階であるということをし、いっているのだ。ここにおいてわれわれは、ヴィットフォークルが言う、封建主義(組織)の歴史性はもちろん、複線性や多様性の構造をみてとれるのである。これは次に述べる大著『市民社会史』で重要な展開をみせ、ヴィットフォークル理論の核心ともなるのである。

この『市民社会史』<sup>(53)</sup>という労作は、一九二四年までの彼の学問の蓄積をフル動員するものであった。歴史学、哲学、

経済学、地理学、民俗学等龐大な知識が動員されている。また、K・カウツキー、M・ヴェーバー、W・ゾンバルト、G・ペロー、E・マイヤー、マルクス等の思想も随所に引用され、論評されている。副題に「その端緒からフランス革命に至るまで」とあるように、内容は、早期資本主義の問題、市民と都市の成立の問題、農民戦争の問題、資本主義の諸段階の問題、資本蓄積の問題と大変広きにわたっている。前の『原始共産主義からプロレタリア革命へ』の人類社会史を、市民発生時からブルジョア革命期までに限定し、鋭い分析を行ったものである。これはまた、ヴィットフォールの今後の理論の骨格を形成するものであった。さてわれわれはここで、この著作の市民と都市の成立の問題に、彼の中国論の萌芽をみてとり、それについて言及してみたい。

ここでは、M・ヴェーバーに特に言及し、都市問題に経済社会史的に取組んだ業績を評価し、また、ヨーロッパの諸都市とアジア諸都市の性質に、根本的差位があると指摘したことに<sup>(55)</sup>対し注目している。しかし、ヴィットフォールは、次のような批判をする。つまり、M・ヴェーバーの都市に関する叙述は、内面的歴史関連がみられず、場合によっては、虚無主義的な混沌状態に陥っていると。さらに、この科学的不可知論は、新カント派の不幸な遺産であり、弁証法を憎んだための高価な代償を予想させるものであると。では、ヴィットフォールが、よるべとするものは一体何んであったか。それは、全歴史を支配する発展の根本法則に関する理論——唯物論的原本原理であった。彼によれば、あらゆる初期社会は、遊牧や農業を中心とする原始共産社会であった。やがて農業社会としての組織が成立し、これは、封建的大土地所有者に主権が基礎づけられた社会であった。ここで最初の実事上の都市が成立してくる。ここでは、異なった諸地域の封建主義が存在し、生産力の特殊な構造と、その内部における活動に原因して、様式の異なった社会生活が成長してあらわれる。つまり、市民の政治的発達——封建権力への隷属か闘争か——の差異がみられるというのである。それを次のように図表化している。<sup>(56)</sup>

この第一表をみると、封建社会におけるブルジョアジーの闘争の有無が、あるいはその内容がどのような結果を生

第1表 都市ブルジョアジーの政治的発達、その発端と現今の地位との比較図表

今日	近代工業諸都市		近代工業諸都市				近代工業諸都市の急速な発生
	未発達	転化的発達	没落	比較的繼續して成功	一時的成功	「直接の成功なし」しかし中央ブルジョア組織された勢力	停滞した政治的官能の成功
結果							停滞した政治的官能の成功
都市ブルジョアジーは彼等の政治的独立のために闘争したか？	否	否	然	然	然	然	部分的に
「原始」建主義							
発達担当者	黒人	ロシア	古代ギリシャ	イクリア	ドイツフランス	イギリス	「アジア」

み、現代に至るかが明瞭に示されている。注目すべきは、背後にある生産力や生産方法、あるいはその構造によって、諸地域の市民の政治的闘争の歴史が展開され、次の時代を決定するということである。そして、この封建社会の複雑性、多様性を明確に打ちだすことにより、アジアを世界の各地域の中で、一つの典型としてとりあげていることである。もちろん、アジアには、インドや日本も入るので言及こそはしているが——日本は例外的に工業資本主義に達し、労働者の出現に適していたと——、なんととってもヴィットフォージェルの興味は中国であり、またその特異性に関心をもっていたのである。彼はいう。「バビロンにおけるように、中国の貴族階級は、その封建的領主『活動』の他に、早くから巨大な錯雑した灌漑設備の官僚的管理と調整に関与していた……それ故に、われわれが、封建時代において貴族的門閥家等が中国の諸都市を所有して、そこから彼らがすこぶる独立的政治を行うのを見ても、何ら不思議がないのだ」と。自然的条件が社会的条件に転化する特異な社会的事態、つまり、灌漑設備の官僚的管理と調整というものは、ヴィットフォージェルの最も注目するところである。



第2表 人類社会の経済的進歩の諸段階

		自由なるもとずく米的工業	負労働に今日欧米資本主義	帝国主義	アジア的専制	ア的主義
	+	古代奴隷・資本主義 (その主要生産力たる奴隷の不発達のために破滅)	早期資本主義	封建制度	(「自由なる労働力」の「欠乏により停滞)	東洋的・農耕官僚政治
農業共産主義		原始的	農耕(遊牧時代)			
原始共産主義		採集民—狩	獵民—漁撈民			

この水耕官僚政治というものは、それを担う封建貴族階級が、自然的支配と社会的支配を一手に引き受け絶対的権力となり、農民との対立は、西欧に比べたら比較的弱いものであった。さらに、これが水耕官僚政治的官吏国家へと発展していった時には、彼らの対立は益々弱まっていった。なぜなら、貴族も農民も、すべてを新たな専制的官僚国家に譲りわたしたのである。西欧資本主義の源泉となった領主による土地没収などは起るすべもなかった。さらに、工業資本主義への移行は、資本とプロレタリアという二つの基本条件を著しく欠き、到達すべくもなかった。ここに、中国独特の経済社会史的な発展の様相をみるのである。この中国の独特な社会構成体はヴィットフォージェルのライフワークとなる『東洋的専制政治』によって、「水力社会」論として、さらに深く論究されるのである。

ここで、封建社会の複線性というところで、マルクスに関連して若干論じておこう。ヴィットフォージェルはこの著書の中で、重要な図表化を第二表のように行っている。これは、封建社会が一直線上に社会発展するということに反論するものであった。この一直線の発展の論者には、歴史学派のF・リスト、K・ビュッヒャー、F・ミユラー・リヤーなどがいた。ヴィットフォージェルは、彼らを批判しつつ、この図表は「マルクスによって何度も暗示されている発展の系図と、ほとんどそっくりで一致するものである」という。もちろん、マルクスの系図とは、『経済学批判』の序言の「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式を、経済的社会構成のあいつく諸時期としてあげることができる」といった

行である。しかし、ここでヴィットフォークルが「ただ一つのマルクスとの差異を示しているのは、われわれの封建制度の配列である。マルクス以後に成しとげられた民俗学や初期歴史的研究が、今日ではわれわれに、封建的生産方法をしておそらく古代や『アジア的な』社会であっても、通過的段階であるとみなさしめるのである」といって、マルクスを批判しているところは興味深い。なぜなら、このヴィットフォークルの著書が出版されてから一五年後、つまり一九三九年に、マルクスの著作『経済学批判要綱』の中の「資本主義的生産に先行する諸形態」の論文が発見され、注目を集める。これは『経済学批判』より一年前の一八五八年に書かれたものであった。そして、社会経済的発展が、単線か複線かで大変重要な意味をもつ論文であった。短いがしごく難解な論文は、アジア的、古代（ローマ）的生産様式、および封建制の原型となるゲルマン的生産様式の差異を明確に論じるものであった。ここに、ヴィットフォークルと、マルクスの近似性をみてとることができるが、この「資本主義的生産に先行する諸形態」の論文の発見が遅れたため、彼のマルクス批判が、書物の上で残ったのである。

皮肉なことに、この論文をアメリカで読むことになったヴィットフォークルは、何を思ったであろうか。とにかく、二年間の現地調査を礎に、中国研究は益々その内容を深化させていったのである。

- (1) K. A. Wittfogel, *Oriental despotism: a comparative study of total power* (Yale Univ. Press, 1957) [『アジア経済研究』所訳『東洋的専制主義——全体主義権力の比較研究』、論争社、一九六一年。]
- (2) 湯浅魁男『経済人類学序説——マルクス主義批判』、新評論、一九八四年。
- (3) 満州国協和会の理事となり関東軍の行動を支持した橋樑（『支那社会研究』、日本評論社、一九三六年、『中国革命史論』、日本評論社、一九五〇年、以上は『橋樑著作集』第一巻、勁草書房、一九六六年、所収）やアジア全域におけるブロック化を主張した宮崎正義（『東亞連盟論』、改造社、一九三八年）などに代表される。
- (4) 戦前における多くの「アジア的生産様式」論者が含まれるが、特にここでは、ヴィットフォークルの翻訳を多く手がけた森谷克己（『アジア的生産様式論』、『アジア的国家形態とアジア的社会構成』、『アジア問題講座』、第六、九巻、創元社、一九三

九年、所収「や平野義太郎（『大アジア主義の歴史的基礎』、河出書房、一九四五年は戦後において物議をかもし書であった）や、国際関係と民族運動の観点から取組んだ尾崎秀実（『現代支那論』、岩波新書、一九三九年）や、民衆の視点で中国問題をおつかつた川合貞吉（『支那の民族性と社会』、再版、谷沢書房、一九八三年）をあげておく。

(5) 一九三二年二月、コム・アカデミー・レニングラード支部東洋学会及びエヌキッセ東洋研究所の共同主催で行われたレニングラード討議において頂点に達した。中心テーマは、招請されなかった「マジャール学派」のアジア的生産様式論の批判であった。M・コキンや、G・ババヤンなどマジャール学説に近い主張もあったが、一連の批判の先頭にはM・ゴードスが立った。彼は「アジア的生産様式」は封建主義に他ならないと結論を下した。この討論に関しては、早川二郎編訳『アジア的生産様式に就いて』、白揚社、一九三二年を参照せよ。

(6) 一九六〇年代、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ民族解放闘争が高揚した時代を背景に、これらの地域の歴史的発展を科学的にとらえ直そうという気運の中、再び「アジア的生産様式論」が、フランス、ソビエトを舞台に開始された。フランスのマルクス主義者J・シユレカナル、M・ゴトリエ、J・シユノー、およびハンガリーの中国学者F・テーケーを中心に『マッセ』（一九六四年四月、一一四号）誌上で始まった。これに関しては、本田喜代治編訳『アジア的生産様式の問題』（岩波書店、一九六六年）を、またソビエトの論争復活に関しては、福富正実編訳『アジア的生産様式論争の復活』（未来社、一九六九年）を参照せよ。

(7) これに関し、戦前戦後を通して文献を整理したのに、次のものがある。沢田勲「日本における『アジア的生産様式論』に関する文献目録」（金沢経済大学論集、九（一）・一九七五年）。

(8) K. A. Wittfogel, "Zur Frage einer marxistischen Aesthetik" (Die Linkskurve, Jahrg. II, Nr. 5, Mai 1930), "Weiteres zur Frage einer marxistischen Aesthetik" (Die Linkskurve, Jahrg. II, Nr. 7, 8, Juli, Aug. 1930), "Nochmals zur Frage einer Aesthetik" (Die Linkskurve, Jahrg. II, Nr. 9, 10, 11, Sept., Okt., Nov. 1930).〔屋井三市「三宅洸共訳『マックス主義美学』』、共生閣、一九三一年。〕

(9) K. A. Wittfogel, "Der faschismus 'bearbt' Hegel" (Linkskurve, Jahrg. III, Nr. 2, Nov. 1931), "Die 25 punkte Hitlers" (Der Marxist Blätter der marxistischen Arbeiterschule, Jahrg. II, Hft. 1, Jan. 1932), "Bauern, Bonzen, Faschisten" (Die Linkskurve, Jahrg. IV, Nr. 2, Feb. 1932), "Warum Hitler seine Konkurrenz Schlug" (Der Rote Aufbau, Jahrg. V, Hft. 13, Juli. 1932), "Ist Hitler der Retter des Mittelstandes?" (Der Rote Aufbau, Jahrg. V, Hft. 14, Juli 1932).

(10) R. H. Rovere, Senator Joe McCarthy (Harcourt Brace Jovanovich, N. Y., 1959).〔宮地健次郎訳『マッカーンズ』、

- 岩波文庫「一九八四年」L. Huberman and P. M. Sweezy, "The Roots and Prospects of McCarthyism" (Monthly Review, Jan. 1954). [雪山慶正訳「マッカーシズムの根源と見通し」『思想』三十五七号「三月」一九五四年。]
- (11) U. S. Senate, Subcommittee, to Investigate the Administration of the Internal Security Act and other Internal Security Laws of the Committee on the Judiciary, Institute of Pacific Relations, Aug. 7, 1951, pp. 273-352.
- (12) 大窪應二編訳『ハーバート・ノーマン全集』全四巻、岩波書店、一九七八年。
- (13) 陸井三郎「ノーマンの死とその背景」、中央公論、七二(八)や同号の「ヒューソン証言全文」ノーマン自殺の真因はなにか」を参照のこと。
- (14) G. L. Umen, The Science of Society: Joward an Understanding of the Life and Work of Karl August Wittfogel (Mouton Publishers, The Hague, 1978) 註「ヴィットフォークルに関する研究書」については景を詳しく、シロノロニカルな面でも大変参考になる。
- (15) ヴィットフォークルとハインツ青年運動の關係について K. Kindt ed., Die Wandervogelzeit (Eugen Diederichs, Dusseldorf/Köln, 1968), pp. 608-617. W. Z. Laquer, Young Germany: A History of the German Youth Movement (Basic Book, N. Y., 1962), pp. 103-118. [西村稔訳『ハインツ青年運動』人文書院、一九八五年、一三二—一四八頁。]
- (16) G. L. Umen, The Science of Society, p. 14.
- (17) *ibid.*, p. 16.
- (18) ヴィットフォークルとノルンシマの關係について M. Buckmiller, "Über Karl Korsch" (Jahrbuch der Arbeiterbewegung J, Dec. 1973), pp. 13-106.
- (19) M. Jay, The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950 (Little Brown and Co., Boston/Toronto, 1973), p. 5. [荒川幾男訳『弁証法的想像力—ノルンクハルト学派と社会研究所の歴史一九二三—一九五〇年』みすず書房、一九七五年、三一—四頁。]
- (20) K. A. Wittfogel, Das erwachende China: Ein Abriss der Geschichte und der gegenwärtigen probleme China (Argis Verlag, Wien, 1929). [二本猛訳『目覚めつつある支那』白楊社、一九二七年。]
- (21) K. A. Wittfogel, Wirtschaft und Gesellschaft Chinas: Versuch der wissenschaftlichen Analysen einer grossen Asiatischen Agrargesellschaft (Verlag von C. L. Hirschart, Leipzig, 1931). [平野義太郎監訳『崩壊過程をたぐる支那の経済と社会』上二巻、原書房、一九七七年。]

- (22) この途中東京にも立寄り、実際に千葉の農村と出向き利根川の灌漑工事などを見聞してゐる。ところが、このスナイ事件で有名になつたR・ゾルゲとは、一九二二年のイルメナウの会議以来旧知であるから、日本のところから会つていふこともない。しかし、その証拠となる資料を確認した訳ではないので、あくまで臆測である。
- (23) 次のようなものが包括的研究書としてある。Z. Jar, *The Frankfurt School: The Critical Theories of Max Horkheimer and Theodor W. Adorno* (John Wiley & Sons, N. Y., 1977). P. Slater, *Origin and Significance of the Frankfurt School: A Marxist Perspective* (Routledge & Kegan Paul, London, 1977). G. Friedmann, *The Political Philosophy of the Frankfurt School* (Cornell Univ. Press, Ithaca/London, 1981). E. Cramer, *Hitlers Antisemitismus und die Frankfurt Schule: Kritische Faschismus-Theorie und geschichtliche Realität* (Droste Verlag, Düsseldorf, 1979). T. Bottomore, *The Frankfurt School* (Tavistock Publication, London, 1984).
- (24) M. Horkheimer, *Kritische Theorie*, Bde. I-II, (Fischer Verlag, Frankfurt a. M., 1968).
- (25) L. Fermi, *Illustrious Immigrants: The Intellectual Migration from Europe 1930-41* (Chicago Univ. Press, 1968). D. Fleming and B. Bailyn ed., *Intellectual Migration* (The Belknap Press of Harvard Univ. Press, Massachusetts, 1969). [榊川トキ子他訳「亡命の現代史」全五巻、みづほ書房、一九七二年。]
- (26) Theodor W. Adorno, *Negative Dialektik* (Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1966).
- (27) J. Habermas, *Theorie der Kommunikation Handels*, Bde. I-II, (Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1981). [原上倫逸他訳「ロッキンゲンション的行為の理論」全三巻、未来社、一九八五年。]
- (28) W. Laqueur, *Weimar: A Cultural History 1918-1933* (Waldenfeld & Nicolson, London, 1974), pp. 140-182. [勝圭平他訳「ワイマール文化を生きた人々」、シネルヴァ書房、一九八〇年、一四七—一八九頁。]
- (29) 共産党の支持だけでなく、フランクフルト研究所の出資者F・ヴァイルも財政的援助をした。(ibid., p. 145. 邦訳、一七七頁。)
- (30) 彼の最大のヒット作『三文オペラ』は、ギャングの世界と資本主義世界の悪をダブらせたもので、歌あり、語りあり、どんでん返しありの「異化効果」をふんだんに用い、天才ブレヒトの名を世界に知らしめた。戯曲の選集として、B. Brecht, *Stücke*, Bde. I-XII, (Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1965-1966). また邦訳では、千田景也編訳『ブレヒト戯曲選集』全五巻、白水社、一九六二年がある。ブレヒトの演劇論として興味あるのは、W. Benjamin, *Versuch über Brecht*, Hrsg. von R. Tiedeman (Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1966). [石黒英男編訳「ブノム」、『ユ

- 「ハヤシマン」著作集』九卷「婦女社」一九七一年〕H. Arendt, Walter Benjamin, Bertolt Brecht: zwei Essays (Piper, 1971), K. H. Ludwig, B. Brecht: philosophische Grundlagen und Implikation seiner Dramaturgie (Bouvier, Bonn, 1975) 248頁°
- (16) ヨハンネーレンとハヤシマンの關係に關しては「F. Trommler, "Das politischrevolutionäre Theater", Die deutsche Literatur in der Weimarer Republik, ed. by W. Rote (Philipp Reclam Jr., Stuttgart, 1974).
- (17) E. Piscator, Das politisch Theater (Henschelverlag Kunst und Gesellschaft, Berlin, 1968), p. 27.
- (18) ハヤシマンの「革命的演劇」について論じたのはその「革命演劇」の序文に於いて。K. Kändler, Drama und Klassenkampf: Beziehungen zwischen Epochenproblematik und dramatischen Konflikt in der sozialistischen Dramatik der Weimarer Republik (Aufbau Verlag, Berlin/Weimar, 1970), pp. 106-108, 110, 141, 416, 427 and 447. W. Fährders and M. Rector, eds., Literatur im Klassenkampf: Zur Proletarisch-revolutionären Literaturtheorie 1919-1923 (C. Hanser Verlag, Munich 1971), pp. 194-197, 209, 229, 230 and 233. L. Hoffman and D. Hoffman Ostwald, Deutsches Arbeiter Theater 1918-1933: Eine Dokumentation (Henschelverlag, Berlin, 1961), G. Rühle, Theater für die Republik: 1917-1933 Im Spiegel der Kritik (Fischer Verlag, Frankfurt a. M., 1967), pp. 200-2001.
- (19) K. A. Wittfogel, Rote Soldaten: Politische Tragödie in 5 Akten (Malik Verlag, Berlin, 1921).
- (20) K. A. Wittfogel, Der Man, der eine Idee hat: Erotisches Schauspiel in 4 Akten (Malik Verlag, Berlin, 1922). [英訳] 朗読『理想をもちつゝ男』(「ソネット」)一九二七年°]
- (21) K. A. Wittfogel, Die Mutter, Der Flüchtling: Zwei Einakten mit einem Anhang über Grenzen und Aufgaben der revolutionären Bühnenkunst (Malik Verlag, Berlin, 1922).
- (22) これは「革命的演劇論」として『無産階級芸術論』(ボンダーン著、麻生義訳、人文社、一九二六年)の中に邦訳がある。一三三—一五二頁。
- (23) K. A. Wittfogel, Wer ist der Dümme?: Eine Frage an das Schicksal in einem Vorspiel und vier Akten (Malik Verlag, Berlin, 1923). [辻恒彦訳「誰か一番馬鹿だ?」、『新興文学全集』第一八巻「平凡社」一九二八年があり、引用は同じくは参考しておられたことだ。]
- (24) K. A. Wittfogel, Der Wolkentrater: Amerikanischer Sketch (Malik Verlag, Berlin, 1924).
- (25) K. A. Wittfogel, Wer ist der Dümme? pp. 78-79. 邦訳は三〇—五三頁°
- (26) G. L. Umen, The Science of Society, p. 19.

- (42) *ibid.*, p. 29.
- (43) K. A. Wittfogel, Die Wissenschaft der bürgerlichen Gesellschaft: Eine marxistische Untersuchung (Malik Verlag, Berlin, 1922). [北村奎之介訳『マルキシヨ社会の科学』叢文閣 一九二八年があり、引用に関して参考をなされた。]
- (44) *ibid.*, p. 9. 邦訳八頁。
- (45) *ibid.*, p. 11. 邦訳一〇頁。
- (46) *ibid.*, p. 27. 邦訳三九頁。
- (47) *ibid.*, p. 32. 邦訳四七—四八頁。
- (48) オランダ出身の、ライデン大学のインド地理学、民族学、シナ学の教授となつたが、後にイェールン大学にシナ学教授として招聘される。特に中国の宗教や風俗について研究してつゝる。J. J. M. De Groot, The Religious System of China 6 vols., Repr. of 1892 (Oriental Book Store, 1982). Sectarianism & Religious Persecution in China, 2 vols., Repr. of 1903 (Biblio Dist., 1972). The Religion of the Chinese, Repr. of 1910, (Hyperion Comm., 1981).
- (49) K. A. Wittfogel, Die Wissenschaft der bürgerlichen Gesellschaft, p. 32. 邦訳四八—四九頁。
- (50) *ibid.*, p. 33. 邦訳五〇頁。
- (51) K. A. Wittfogel, Vom Urkommunismus bis zur proletarischen Revolution, I. Teil: Urkommunismus und Feudalismus (Verlag Jung Garde, Berlin, 1922). [新島繁訳『市民社会史』叢文閣 一九三六年に邦訳あり、引用に関しては、参考をなされた。]
- (52) *ibid.*, p. 71. 邦訳六三頁。
- (53) K. A. Wittfogel, Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft: Von ihren Anfängen bis zur Schwelle der Grossen Revolution (Malik Verlag, Berlin, 1924). [邦訳は同右書に依る。]
- (54) M. Weber, Die nichtlegitime Herrschaft (Typologie der Städte), Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehen den Soziologie, Hrsg. V. J. Winkelmann, 5 Aufl. (Mohr Verlag, Tübingen, 1976). [神島良彦訳『都市の類型学』創文社 一九六七年。]
- (55) M. Weber, Konfuzianismus und Taoismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, 4 Aufl. (Mohr Verlag, Tübingen, 1947). [木全徳雄訳『儒教と道教』創文社 一九七一年。]
- (56) K. A. Wittfogel, Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft, p. 101. 邦訳二八三頁。

- (57) *ibid.*, p. 119. 邦訳二一七頁。
- (58) *ibid.*, p. 106. 邦訳二九三頁。
- (59) *ibid.*, p. 121. 邦訳三三二頁。
- (60) *ibid.*, p. 121. 邦訳三三三頁。
- (61) K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie (ME works, Band 13, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1961). [杉本俊郎訳『経済学批判』、大月書房、一九五三年、一六一―一七頁。]
- (62) K. A. Wittfogel, Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft, p. 121. 邦訳三三三頁。
- (63) K. Marx, Formen, die der kapitalistischen Produktion vorhergehen (Grundriss der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz-Ausgabe, 1953, S. 375-413). [手島正毅訳『資本主義的生産に先行する諸形態』、大月書店、一九六三年。]